



こころを育む
総合フォーラム



こころを育む総合フォーラム

2024年度 活動報告書



公益財団法人 パナソニック教育財団



こころを育む 総合フォーラム より

「こころを育む総合フォーラム」は、日本人のこころの荒廃に危機感を抱き、それにはどめをかけたいたい
の思いを共有する有識者16名が集い、2005年4月に設立されました。日本人のこころのありようについ
て討議を重ねた結果、2007年に未来を担う子どもたちのためにできることを提言にまとめました。提言
では、家庭・学校・地域・企業のそれぞれの立場から子どもたちのこころを育むためにできることを「問
い」のメッセージとして呼びかけています。

2008年、この提言内容を全国にムーブメントとして広げていくことを目的に、子どもたちの“こころを
育む活動”を応援する全国運動を始めました。毎年、全国各地で取り組まれている“こころを育む活動”
を募集。際立った活動について表彰し、広く紹介しています。

2019年、鷲田清一を座長に新たな体制で第二期をスタート。現地で活動の取材をするなど、より現場
に寄り添った運営・推進を展開しています。

本書が“こころを育む”環境づくりのための取り組みのヒントになり、活動の輪がさらに広まるきっかけ
となれば幸いです。

活動の 経緯

- 2005年 「こころを育む総合フォーラム」発足
学界、経済界をはじめ各界を代表する16名のメンバーで発足
- 2007年 「提言書」を公表
- 2008年 全国キャラバン、子どもたちの“こころを育む活動”の募集・表彰を開始
- 2011年 トヨタ財団・パナソニック教育財団「東日本大震災支援共同プロジェクト」
- 2013年 特別対談企画「日本人としての教養〜次世代に継承したいこと」
(東洋経済オンラインとの共同企画)
- 2015年 フォーラム活動10年特別シンポジウム開催
- 2017年 全国運動10年記念表彰式開催
- 2019年 「第二期 こころを育む総合フォーラム」をスタート
鷲田清一座長を中心に新たなメンバー11名でスタート

提言書

家庭・学校・地域・企業の4つの分野で、子どもたちのこころの育みのために
大人たちができることを、自己の内心に向かって問いかける「七つの問い」の形
で呼びかけています。

具体的には、家庭に向けて「親（保護者）の姿勢が、子どものこころを創って
いるという自覚があるだろうか」、学校に向けては「教師は、一人ひとりの子ども
に自信をもたせる努力をしているだろうか」など、4分野それぞれに対して「七つ
の問い」を提案しています。

提言書の詳細は、「こころを育む総合フォーラム」ホームページでご覧いただけます。

<https://www.pef.or.jp/kokoro-forum/phase1/message/>



フォーラム
の
目指す姿

家庭・学校・地域・企業などで取り組まれている「子どもたちの“こころを育む活動”」を通して、子どもたちに持ってほしい“3つのこころ”をバランスよく育むことを目指しています。

自分に向かう
“こころ”

自立心や自尊心を確立し、
人間らしさや自分らしさを
理解するこころ



子どもたちに持ってほしい
“3つのこころ”

他者に向かう
“こころ”

人と人のかかわりを大切
にし、他者を思いやり、
傷つけないこころ



社会に向かう
“こころ”

さまざまな価値観を尊重し、
社会と自分の関係性を
理解するこころ



こころを育む総合フォーラム メンバー



座長

鷲田 清一
大阪大学 名誉教授



入江 杏

文筆家・
ケアミーツアート研究所代表・
上智大学グリーンケア研究所
非常勤講師



小国 綾子

毎日新聞ジャーナリスト



工藤 啓

認定NPO法人育て上げネット
理事長



玄田 有史

東京大学
社会科学研究所 教授



鈴木 みゆき

國學院大學人間開発学部
子ども支援学科 教授



高際 伊都子

渋谷教育学園
渋谷中学高等学校
校長



堂本 晃代

パソニックホールディングス株式会社
企業市民活動担当室
室長



増田 明美

スポーツジャーナリスト、
大阪芸術大学 教授



山極 壽一

総合地球環境学研究所
所長
前京都大学総長

2024年度 子どもたちの”こころを育む活動”表彰式



2025年2月7日、日比谷三井カンファレンス（東京都千代田区）にて2024年度「子どもたちの”こころを育む活動”表彰式」を開催いたしました。

17回を迎えた今年度は、過去最高となる214件のご応募をいただき、書類選考、現地調査などの厳正な審査の結果、高い評価を得た6団体を表彰。当日は、ご来賓やフォーラムメンバー、全国から来場された受賞団体の方々など、46名の方にご出席いただきました。

表彰式では、各団体の熱意あふれる献身的な活動内容が紹介され、表彰を受ける方々に惜しみない拍手が送られると、会場は感動と祝福の空気に包まれていました。

ここでは、表彰式や交流会の様子についてご紹介いたします。会場の活気を感じていただけたら幸いです。

主催者挨拶、来賓祝辞

小野理事長より、20周年を迎える当フォーラムが17年間で2600件余りのご応募をいただき、そのうち約140件を表彰したことを報告しました。また、戦争や凶悪犯罪の不安が高まっている今、「子どもたちのこころを育むことが大人をはじめ、今の日本に大切」との設立趣旨が、まさに重要性を増していることを話しました。最後に「こころを育む活動が全国において多種多様な形で取り組まれていることは本当にありがたく、この一生懸命な無償の取り組みが日本の将来に夢を与える」と、今後への期待を語りました。

来賓代表として、文部科学省 総合教育政策局の平野氏からは「受賞された活動は、いずれも地域の中で子どもたちが安心できる居場所をつくる素晴らしい内容だと感じました。次代を担う子どもたちは、多様な人々と協働しながら課題を乗り越えて人生を切り開き、持続可能な社会の作り手となることが求められています。皆様の活動は、少子高齢化やデジタル化など社会構造が変化する中で、今後さらに重要性を増していきます。受賞を機により一層発展し、広がることを期待します」との温かいご祝辞をいただきました。



主催者挨拶
パナソニック教育財団 理事長
小野元之氏



来賓ご祝辞
文部科学省 総合教育政策局
社会教育振興総括官 平野誠氏

各賞の発表・表彰

各団体の活動を動画でご紹介後、特別賞、優秀賞、全国大賞の順に受賞団体を発表。受賞者より、喜びの声をいただきました。

全国大賞を受賞したOneStepの丸井代表は「2012年に美容室の交流会を始め、2014年からは何か社会貢献できないかと児童養護施設でのボランティアカットを始めました。『継続』を目標に10年続けてきた活動が受賞につながりました。『継続はチカラになり、カタチになる』のテーマが今日、本当に一つの力・形になりました」と喜びを語りました。また、ハサミの販売・修理に携わる同氏は「ハサミは髪を切るだけでなく『悪縁を断ち切る』『未来を切り開く』神仏」との思いを美容師さんに伝えることで、子どもたちの豊かな未来が切り開かれていくことを話されました。

表彰式後には参加者全員での記念撮影を行い、皆様の晴ればれとした笑顔が見られました。受賞が少しでも皆様の励みになるとともに、素晴らしい活動がより多くの方々の目に留まり、ますます発展していくことが期待されます。



OneStep（美容師交流会・美容師ボランティア団体）代表 丸井教彰氏（左）と団体総務 齋藤栄一朗氏（右）



🌟 フォーラムからの祝辞

「失敗が許される。あるいは失敗が勧められる環境が大事ではないか」と、まるでセレモニーでネクタイを忘れた私の弁解のようですが、そのようなお話をしたいと思います。

子どもにとって学校は、皆が同じ速度で進み、同じ基準で評価され、頻繁にチェックが入る組織化された教育の場で、少し息苦しい場所です。その息苦しさをうまくかわす子もいますが、大半は集団から落ちこぼれないように、息をひそめて縮こまっていると思います。

このような息苦しさを考えるとき思い浮かぶのが、大阪出身の洋画家、小出楯重氏が書いたエッセイです。そこでは、自分が「算術嫌い」なのは $50+50=100$ と、誰が計算しても答えが一つなのが気に食わないからだ、と、当時の歌舞伎役者を例に説明しています。今で言うと「 $50+50$ も團十郎がやれば130に、猿之助は180に、玉三郎は300になるようでないとつまらない。50の資金に50を足してみんな100になれば商売に工夫はいらない。10円払うと釣銭はいくらかなんてけち臭い話は嫌だ。釣りはとっとけ、くらいでないと」とね。

私は大阪にいたときに、環状線の駅で、この話と全く同じ経験をしたんです。

自動券売機の前で大阪人ではない女子学生らしき人が、200円を入れたら500円玉のお釣りが出て「どうしよう」ともじもじしていた。すると、いかにも大阪人風のおじさんがひと言「とっとき」と言いました。この光景を見て小出さんの文章を思い出し、200円を入れて500円が出てくるって素敵だな。この場合、駅員さんや警察に届ける以外にも、大阪の美味しいものを食べたり、土産代にしたり、募金したりと、答えは一つじゃないんです。

このようなおじさんやおばさんがいる町は「失敗しても、また別のやり方でやればいい」と、大らかに失敗を認めてくれる、すぐ子育てがうまい町だと思います。失敗すれば「今度はもっとこうしよう」とたくましさも出てくるし、人のこころの傷や痛みも分かります。子どもが勝手に、たくましくてこころの優しい、思いやりのある人に育つ場所をつくるのが我々の責任かと思います。皆様の貴重な取り組みを全国にご紹介し、ヒントを得て新しい活動をなさる方が増えるのを、こころから願っております。本日はおめでとうございます。



座長 鷲田清一氏(大阪大学名誉教授)

交流会



活発な情報交換が行われるとともに、笑顔の絶えない和やかな歓談のひと時に



▲乾杯のご発声は、フォーラムメンバーの堂本晃代氏



▲受賞団体の活動を詳しく紹介したパネルや資料を展示



活動では子どもとの距離を縮め、今日は夢の受賞から現実に戻らないためマスク姿に



◀マスク姿で挨拶をするOneStep丸井代表



▲今帰仁子供太鼓いまじんの皆様による「エイサー」披露で、会場は大いに盛り上がりました

受賞団体 活動紹介

全国
大賞

美容師交流会・美容師ボランティア団体 OneStep【千葉県】

継続はチカラになり、カタチになる

選考理由

美容師ならではの高いコミュニケーション力と子どもたちとの間に築かれたナナメの関係性が、子どもたちに癒しや希望を与えている点が大きく評価されました。このようなプロボノ活動が増えていくことが期待されます。

活動の概要と目的

**髪を整えることは、気持ちを整えること。
美容師とのふれあいから未来への思いを膨らませます。**

美容師の技術を生かして地域貢献、社会貢献を目指す「OneStep」は、千葉県内の児童養護施設を訪ね、子どもたちのボランティアカットをする活動を10年前から続けています。活動の特長は、髪を切ることを通して、子どもたちの肩越しにさまざまな会話をし、施術の前後には一緒に遊んだり、お菓子をプレゼントしたりと、子どもたちが心を開放できるようなコミュニケーションの機会を創り出していることです。

髪を整えることは、気持ちを整えることにつながります。子どもたちは温かい雰囲気の中、鏡の中で次第に変化していく自分の姿を見て、はにかみながらも笑顔に。トークを交えながらサロンワークと同じパフォーマンスをする美容師を見て、将来は美容師になりたいと考える子どもも出てきています。

定期的に訪れる美容師とのふれあいから社会を知り、自分の未来に思いを馳せ、心豊かに成長していく契機となっています。

子どもたちの変化・成長



施設の子どもの7割が虐待を経験し、心を閉ざしていることが多いのが現状です。それが徐々に「ありがとう」と言うようになり、鏡の中で向き合うようになり、言葉づかいが変わり、表情が明るくなり、カット後の掃除を手伝うようになり、少しずつ変化してきます。一般家庭の子どもでもなかなかできない毎月のカットによっておしゃべりになり、自分に自信が持てるようにもなります。



千葉県内の3施設において年間24回ほど実施。毎回5人から10人の美容師が施設を訪れ、30～60人程度の子どものヘアカットをしています。



子どもたちのプライベートへの配慮が必要ですが、そこは多様なお客様とコミュニケーションをしているプロ。一歩ずつ子どもたちとの距離を縮めます。

参加者の声

美容の技術で生かされてきたので世の中へ何か恩返しをしたいと始めたが、活動を重ねる中で子どもたちの成長をわが子のここのように感じるようになりました。(美容師)

子どもたちが私たちの活動を少しでもありがたいと思ってくれたら、大人になったとき自分ができると世の中に恩返しをしてほしいと思います。(美容師)

知らなかった社会の一部に関わっていること、自分の当たり前が当たり前じゃないことに、改めて感謝をしつつ活動しています。(美容師)

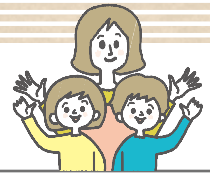
いろんな事情があるのは承知の上で「これからの自分の物語(人生)を、主役は自分なんだと目一杯楽しんで!」とメッセージを送っています。(美容師)

子どもたちはカットしてもらっただけでなく、One Stepの美容師さんと会うことを毎月楽しみにしています。(施設職員)

美容師さんは子どもたちにとって「相談に乗ってくれる存在」。一対一のコミュニケーションを楽しんでいるのがわかります。(施設職員)

今後の課題と未来の方向性

美容師も結婚や出産などのライフイベントで活動に参加できなくなるが多いため、新たなメンバーを常に募集中です。また資金面では、美容師の交通費くらいは出せるようにし、ハサミだけの持参で気軽に参加してもらえるよう必要備品も揃えたいと思っています。美容師になりたいと考える子どもたちのため、美容学校の学費を負担し、メンバーのサロンに就職できるような仕組みを考えています。このため、2025年中にNPO法人化をして支援体制を広げていく予定です。



活動の特長

美容師ならではのスキンシップと肩越しの会話で心を通わせる

美容師の強みは、髪に直接ふれる「スキンシップ」を行えること。髪にふれることは癒しになり、気持ちをほぐすことにつながります。鏡の中、肩越しの近い距離で学校のこと、友人のこと、日常の出来事などが子どもたちから語られるほか、将来について相談を受けることも少なくありません。美容師は知り合いのお兄さん、お姉さんの存在として、子どもたちに来訪を待たれています。



子どもたちとのふれあいを楽しくするため、「ピウノチカラ」で貢献するチーム感を出すためのカラフルなユニフォーム。

各メンバーのサロンでもドライヤー募金や被災地支援を展開

メンバーは自分のサロンに「ドライヤー募金箱」を置いています。児童養護施設のドライヤーは常に不足しているため、千葉県内の約20施設に毎年ドライヤーを寄付。熊本地震や能登地震の際には、被災地の児童養護施設にもドライヤーと義援金を送りました。サロンの募金箱をきっかけにお客様から活動を知られるようになり、食品や雑貨などの寄付品が持ち込まれるなど支援が広がっています。



メンバーのサロンに置かれているドライヤー募金箱とパンフレット。

子どもたちの自立も支援 ハサミ一本から広がる社会貢献

児童養護施設の子どもたちはいずれ自立しなければなりません。このため高校時代からアルバイトをして資金を貯めています。住まいを借り、家具や家電をひと通り揃えるのは大変です。そこで美容室のお客様やメディア、地域の多様なつながりを活かして、家具や家電のリサイクル寄付を募っています。また、地元農家から規格外野菜を譲り受け、施設に寄付する活動も行っています。



ドライヤー募金でドライヤー20台を購入し、千葉県の児童養護施設長会議に出向いて手渡しした際の写真。

活動の広がり

2012年、独立準備や美容技術向上の勉強会を目的とする美容師交流会OneStepが発足。2014年に一人の美容師が児童養護施設「恩賜園」でボランティアカットを始めたことをきっかけに、メンバーの社会貢献活動への思いが高まりました。各サロンを拠点にしたドライヤー募金や被災地募金のほか、地域の人や団体と連携し、さまざまな活動を展開。10年間にわたる活動の「チカラ」が、多彩な支援の「カタチ」を生んでいます。



連絡先

- 所在地：〒274-0077 千葉県船橋市葉円台1-5-9 エムワンテラス103 hair salon sun crest内
- E-mail：info@onestep2012.org ●ホームページ：https://onestep2012.org/
- 代表者：丸井 教彰(代表)

優秀賞

特定非営利活動法人 れでいばーど【埼玉県】 こどもをみまもる小さな町の3つの居場所

選考理由

地域の特長を活かし、地域で連携しながら、さまざまな居場所やイベントを通して総合的に子どもたちがのびやかに育つ環境を作り出している点が高く評価されました。これからの居場所づくりの好事例と言えます。

活動の概要と目的

**経済的・体験的格差なく子どもたちが成長できるように
町にさまざまな体験ができる3つの居場所をつくりました。**

人口38000人ほどの小さな町に、申し込み不要で無料の〈子ども食堂・農園・文庫〉を創設。子どもたちが経済的・体験的格差なく成長できるよう地域で支えながら、子育て家庭を応援しています。

子ども食堂は、利用者の制限がなく誰でも参加できるうえ、屋外でクイズや実験、演奏などのさまざまな体験ができるようになっています。

農園では野菜の種まきや収穫、収穫物を使った料理、試食などの食育体験ができ、虫探しも楽しめます。農作業を通じて友達や家族、地域の大人と交流し、ほめられた経験が、子どもたちの自信となっています。

洋館を開放した私設文庫は、週2回夕方から開室し、月1回はワークショップなども実施。小学生や中学生たちがのびのびと学び、自分らしく過ごせるくつろぎの空間になっています。

子どもたちは、生活圏に安心できる3つの居場所を得て豊かな体験を積み、地域の人々と交流しながら、健やかな心身を育てています。

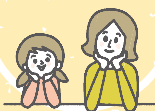


コロナ禍で人とふれあう機会が減った子どもたちのために何かしたいと、休耕地300坪を借りて「農縁」を開始。名前には人の縁を結ぶ願いが込められています。



月2回開く食堂は毎回約150人～200人に利用されており、「ただいま」「おかえり」の挨拶が行き交うアットホームな空間となっています。

子どもたちの 変化・成長



食堂に参加するうちに「料理人になりたい」と語る子どもおり、活動がこころに響いているのがわかります。また、農作業では人にほめられ、感謝されて自信がつき、自己有用感が高まっています。文庫ではのびのびと学び、体験し、友情を深め、楽しく達成感を得ています。

参加者の声

おいしいごはんをいつもありがとう。おかえりって言われるとうれしくなるし、おかしももらえるからめっちゃうれしい。

(子ども食堂/小学4年生)

友達とごはんが食べられるから子ども食堂が大好き。留守番してても火曜日は友達と約束して絶対にここにくることにしてる。

(子ども食堂/小学5年生)

皆さんが子どもたちのことを覚えてくださって、特性も理解して温かく見守ってくださいました。とても楽しく美味しい時間でした。

(おなま農縁/畑ピクニック/保護者)

秋晴れのなか、落花生の収穫、虫探し、とてもおいしいカレーの昼食、リース作りを経験し、子どもたちは大喜びでした。

(おなま農縁/畑ピクニック/保護者)

人と仲良くなれたり、イベント主催の一員になったり、新しい体験ができていい思い出になる。私が素でいられる場所でもある。

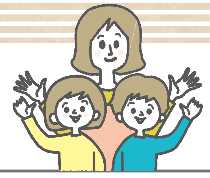
(文庫/中学2年生)

おいしいケーキ作りとっしょに実験もできてとても楽しめました。家に帰ってから、もう一度実験してみたいと思います。

(文庫/小学校低学年)

今後の課題と 未来の方向性

今後は、後継者問題を含めた法人のあり方を見直すことが課題です。3つの居場所は、18歳を過ぎて居場所から単立った子どもたちが、ボランティアスタッフとして戻ってくる場所としても機能しています。これからも学生の居場所として継続できるように力を尽くしながら、自己発揮する経験の場を提供できる「子ども向けワークショップ」などの充実を図っていく予定です。



活動の特長

地域に開かれたコミュニティ型の「三芳おなかま子ども食堂」

利用者を限定せず、子育て世帯を中心に地域の誰もが利用できる食堂を月に2回開いています。予約不要で無料のため小学生だけでの参加も多く、孤食になりがちな子どもの心身を満たす居場所となっています。また、保護者が息抜きに利用することで、子どもとふれあう時間やこころのゆとりを捻出。食事以外にも、遊びや季節行事のほか各種体験を企画し、子どもたちの経済的・体験的格差を補っています。



テントの外では遊びや体験イベントを実施。テント内では、食料品や日用品を無料で渡す活動を行っています。

交流を通して自己肯定感も育つ「三芳おなかま農縁(のうえん)」

種をまき、収穫し、育てた野菜をみんな味わうほか、収穫物を食堂で使い、食堂で出た残滓を肥料にするなど「食べ物の循環」を体感する食育を積み重ねています。特に農作業においては、友達や家族、地域の大人と交流するなかで、ほめられ、感謝された経験が自信や自己肯定感を育んでいます。また、虫を探したり、巨大野菜を切ってみたり、ハーブリースを作る経験も。自然への感動や興味もすくすくと育まれています。



日曜日に畑を解放。月2～3回は畑の作業を通した食育を行い、年数回は収穫&食事会「畑ピクニック」を開催。

おしゃれな洋館でのびのび過ごす「三芳おなかま文庫」

2階建ての洋館を利用した私設図書室は、週に2日夕方から開室しており、夕方は小学生中心の遊び場に、夜は中学生を中心とした学習や読書、くつろぎの場になっています。また、月に1度はワークショップを実施。子どもたちは、デザート作りを通して地球温暖化のメカニズムを知ったり、講座で学んだお金の流れを秋まつりの出店で実践したりと、さまざまな体験学習で好奇心や自主性を育んでいます。



図書室は毎週月曜日と木曜日に夕方・夜の2部制で開室され、毎回15人ほどの小中学生が通っています。

活動の広がり

2011年に現NPOを設立し、2017年に子ども食堂をオープン。2021年に休耕地300坪を借りて農縁事業を開始し、2024年に文庫を開設しました。地道な働きかけの結果、食堂ではプロの料理人を含めたボランティアの方々に、体験企画では近隣の大学や協力企業に、農縁では地元農家の方々に協力を得るなど、多くの企業や個人に支援されています。



連絡先

- 所在地: 〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町北永井704-9
- E-mail: ladybird87@ozzio.jp ●ホームページ: <https://ameblo.jp/ladybird-2011>
- 代表者: 飯塚 結花 (代表理事)

優秀賞

特定非営利活動法人 東京里山開拓団【東京都】 児童養護施設の子どもたちとのふるさとづくり

選考理由

子どもたちが主体的に、そして楽しみながら自分たちの居場所づくりをしている点が高く評価されました。そこで培われた開拓者精神が、挑戦心やゼロからつくり上げる力を育み、子どもたちの自立を促しています。

活動の概要と目的

開拓者精神を発揮して荒れた山林を開拓し、荒廃した空き家を修復して自らふるさとをつくり出しています。

虐待や貧困などから家に戻れない児童養護施設の子どもたちと、荒れた山林や空き家を再生し、ふるさとを自らつくり出すボランティア活動です。山を開拓するおもしろさと人のこころを開く里山の力を実感していたアウトドア好きの代表が、かつてのボランティア経験から児童養護施設の子どもたちと一緒に開拓することを発案し、活動が始まりました。

八王子の里山では、道をつくるところから始まり、かまどやトイレ、遊具といった設備のほか、ツリーハウスなども一緒に作り上げました。

ふもとでは、朽ちかけていた築300年の古民家を改修し、ふるさとの家「さとごろりん美山」を開設。里山生活を満喫できる空間に再生しました。

都心でも空き家を改修した「まちごろりん世田谷／豊島」を開設。18歳で施設を出る若者たちの自立を家賃無料等で民間から応援しています。

開拓者精神で取り組むふるさとづくりは、子どもたちのこころの安定や自信につながり、さまざまな社会課題の解決にも貢献しています。

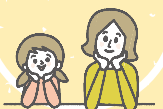


失敗を恐れず試行錯誤し、楽しみながら困難を乗り越える「開拓者精神」を大切にしています。里山の開拓は、生物多様性の保全にも貢献しています。



里山の開拓作業や遊びの時間は仲間との絆を深め、自然に役割や居場所をつくります。石かまどで作る昼食も大好評。写真は里山での運動会の様子です。

子どもたちの変化・成長



つらい経験からこころを閉ざした子どもも、荒れた山林の開拓や荒廃した空き家の修復を進めるなかで仲間と協力し、工夫して自ら居場所をつくる達成感や自信を得ています。活動は開拓者精神を培うとともに「ありのままでもいい」「生きることは楽しい」と気づく機会にもなっています。

参加者の声

ツリーハウスをつくる作業はおもしろく、かまどの修理では熱中しました。里山では楽しく気分転換できます。

(児童養護施設入所中の高校生)

小学2年から通い始め、里山の虜になりました。無心になって全力で遊び、里山だからできることをみんな笑顔でやっていました。

(児童養護施設を退所した大学生)

里山でご飯を作る際、普段一緒に暮らしている子の意外な一面を見ることができておもしろかったです。

(児童養護施設退所者)

子どもたちの成長した姿を見ることができ、人とつながり、自然体験だけでない楽しみがあるから続けられたと思います。

(ボランティアスタッフ)

自己中心的な子が活動中は気遣いできるなど、違う一面を発見。活動に大きな影響を受けていたことがわかります。

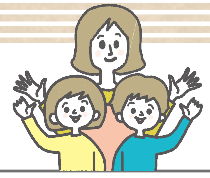
(児童養護施設長)

空いていた家を5年間使ってもらうのは、家を将来どうするかを決める猶予ができ、こちらも助かります。

(まちごろりん世田谷の家主)

今後の課題と未来の方向性

開拓した里山や「さとごろりん美山」に通い続けることで、子どもたちの本当のふるさとのような存在になることが期待されています。課題は、全国で年に数千人、東京だけでも数百人いる施設退所者が生活に困窮しないように、速やかに場所の確保をしていくこと。「まちごろりん世田谷／豊島」では、〈施設退所者の真の自立応援〉と〈公的助成に依存しない民間運営〉を成功させ、第3、第4の拠点確保を目指します。



活動の特長

荒れた山林の開拓を通じて 場所を開き、居場所を自ら創り出す

「よりたくましく、よりすこやかに」という活動方針のもと、子どもたちを支援対象ではなく仲間として受け入れ、12年で2000人以上が活動に参加。辛い経験からトラウマを抱えている子も、荒れた山林を伐り拓く中で場所を開いて本来の自分を取り戻し、居場所を見つけ、生きる楽しさを感じています。開拓者精神を胸に試行錯誤しながら達成した経験は、未来を伐り拓く力となり、成長を後押ししています。



無心に根を掘り、思いついて小屋をつくるなど、自由にのびのびと行動する子どもたちは、自然と笑顔になります。

古民家を再生してつくったふるさと の家「さとごろりん美山」

里山のふもとで朽ちかけていた築300年の古民家を、施設の子もたちや職員と一緒に片付け、DIYで修復。広間にハンモックを取り付けたほか、薪ストーブや薪サウナ、囲炉裏、コンポストトイレ、雨水浄化タンクなどの設備もつくり上げました。ふるさとの家は、里山の開拓で訪れた子どもたちはもちろん、施設退所者が協力参加する機会も創出。施設で問題を抱えた児童の緊急滞在先にもなっています。



里山生活を満喫できる癒しの場。施設で問題を抱えた児童が緊急利用した際にも「楽しい」と満面の笑顔に。

空き家改修で施設退所後の自立を 応援「まちごろりん世田谷/豊島」

18歳で施設を出る若者たちが、都心の空き家を期間限定・無償で借りて改修し、居場所をつくり出す活動です。豊島区と世田谷区の物件には計5人が入居。5年間家賃無料の間に積み立ての習慣をつけるほか、毎月の会議やイベントで困りごとなどを一緒に解決し、生活習慣を整え、仲間づくりを進めています。さらに中古家財の提供や連携企業の働き口紹介などの自立応援を、低コストの民間ボランティア運営で実現しています。



里山の木を階段の手すりに使ったり、竹垣や縁側に利用したり、楽しく工夫しています。写真はまちごろりん世田谷の改修風景。

活動の 広がり

里山開拓に賛同する最初の児童養護施設が見つかるまで約2年が経過。以後は実績を積み、紹介を得て、現在は6組織が参加するように。「まちごろりん」用の空き家探しにも最初は苦戦。チラシ投函や地道な働きかけから共感する企業や個人の協力が得られ、5年間無料で借りられる2物件を確保しました。協力の輪が今後さらに広がるのが期待されます。



連絡先

- 活動場所：東京都八王子市、世田谷区、豊島区
- E-mail：kaitaku-jimu@googlegroups.com
- ホームページ：https://satoyamapioneers.web.fc2.com
- 代表者：堀崎 茂 (代表)

優秀賞

裾野市東地区おやじの会【静岡県】 「出会い」を重視した日常の関係づくりの場

選考理由

どこの地域でもすぐに始めることができる拡がりやすさが高く評価されました。地域全体で子どもたちを見守り、育むコンセプトや、継続させることに重点を置いている点もこの活動の優れているポイントです。

活動の概要と目的

**地域のつながりを強化し、
将来の地域活動の担い手を育成しています。**

地域づくりは非日常的なイベントではなく、日常の幸せづくりであるという考え。運営方針として「言い出しっぺ実行委員長方式」を採用しており、やりたい人が主導して活動を行うことで、新しいアイデアが生まれやすい環境を作っています。

月1回のお泊まり会「何にもしない合宿」を中心に活動。参加者は小学生から社会人まで、幅広く毎回100人前後が集まります。単なる体験提供ではなく、地域のつながりを強化し社会性を育みます。世帯収入が低い家庭ほど学外体験ゼロの子どもの割合が高くなります。そうした体験格差を埋める役割も果たしています。

不登校であっても社会と関わることができる、子どもたちの重要な居場所となっています。不登校は学校だけの問題ではなく、地域社会全体の課題。評価や指示のない環境で子どもたちが友達関係を構築し、自己肯定感を高める機会があります。

子どもたちの 変化・成長



通学と通勤のタイミングが一緒になれば挨拶しますし、スーパーやドラッグストアで顔を合わせれば、名前を呼びながらめっちゃくちや近づいてきたりします。不登校傾向の子どもにとっても、年下から慕われ、年上から頼りにされることで、自己肯定感を再構築できる場になっています。



毎回100人前後が集まり、140人にもなることも。小学生のみ対象でしたが、中学生、高校生になって「また、来たい」との声が。そのうちに参加年齢層が広がりました。



学校と家庭以外につながりを持っていない子どもたちの存在にアプローチ。日常的なつながりが生まれ、学校生活や地域社会での関係性構築に良い影響を与えています。

参加者の声

転校してきてすぐに、おやじの会の活動に出会えました。同じ学校の子たちだけではなく、隣の小学校や中学生、高校生、大人たちとも仲良くなりました。(小学5年生)

中学校の3年間、ほとんど学校には行きませんでした。おやじの会の活動はほぼ参加。高校へも進学し、留年しながらも卒業に向け、頑張っています。(高校生)

高校に進学して初めて、他では「お泊まり会」がないことを知りました。高校も大学も、進学は「地域」を意識した専攻に。おやじの会の影響です。(大学1年生)

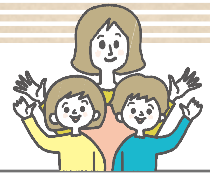
大学では地域創生学部を選び、卒論を「何にもしない合宿」で書きました。大学の同期に活動のことを紹介したら、彼の地元でも開催しているようです。(大学4年生)

小学校卒業後も関わり続けたいと強く伝えたことで、中学生の参加も認めてもらえるように。合宿の空気感は、わくわくしていた昔と全く変わりません。(大学4年生)

3年前から参加、小学校卒業以来です。現在では、ほぼ全ての活動に関わっています。地元を住みやすく、より良くするために、これからも関わり続けたい。(社会人20代)

今後の課題と 未来の方向性

小学生だった子どもが高校生となり、現在はスタッフとして参加。合宿育ちの子が地元の小中学校の教員になったり、信用金庫、市役所に勤めるようになり、成長した子どもたちが社会に増えるとともに、周りからの活動への理解も深まると思います。地域の少子化や孤立といった課題に対して、大人同士も交流を深め、地域コミュニティの活性化に大きく貢献しています。



活動の特長

「何にもしない」という活動で、社会性を身につける

いわゆるお泊まり会、夕ご飯や朝ご飯も準備してとか、企画をたてたり……。そういった会は、スタッフが疲弊していきがち。とにかく月一で「できるスタイル」にしています。「何にもしない」という一見シンプルな活動ですが、子どもたちが自主的に遊び、多様な年齢層との交流を通して社会性を身につけることができます。10年経つと小学生だった子は、社会人に。それでも参加しています。



夕食、入浴を家庭で済ませて来館。夜9時まで自由に遊び、持参した寝袋で就寝。朝6時頃に起きて、7時半までには解散します。

やりたい人が全部やるなら、やりたくない人は邪魔をしない

「言い出しっぺ実行委員長方式」を採用。「やりたい」を口に出した人が実行委員として始めるのならば、やりたくない人は邪魔をしないというルール。ドッジボール大会の開催や、映画作りのワークショップ。水でっぼう合戦や遠足、キャンプ(年3回)も行っています。時には子どもの「やりたい」を地域の大人が助けることも。大人たちにとっても自分の子どもと接するような気持ちになり、支援することが自然に。



「親の都合で送り出す」というのもアリ。保護者の休日になり、子どもが地域と関わった状態で育ちます。

コロナ禍での活動制限を経て、消防団と連携。スポーツ教室を開始

学校と家庭以外につながりを持っていない子どもたちの存在にアプローチし、子どもたちを遊びという切り口で地域とつなげています。コロナ禍での活動制限を受けて、2020年12月からは消防団でスポーツ教室を開始しました。現在8種目のスポーツ教室が行われていて、育ってきた子どもたちが、消防団に入団するケースが増えました。将来の消防団員の担い手確保にもつながっています。



2020年からは消防団と連携し、スポーツ教室を開始。その子どもたちが、将来、地元消防団に入団するケースも。

活動の広がり

小学校のPTAの内部サークルから発足。最初はイベントや学校の奉仕活動を行っていましたが、イベントでは体験の場は提供できても、それが「教育」にたどり着いているのかわからなかった。地域による教育は信頼関係がベースなのは、という考えのもと、2012年、月1回のお泊まり会を発案。現在では消防団との連携によるスポーツ教室の開催など、活動の幅を広げています。



連絡先

- 所在地: 〒410-1121 静岡県裾野市茶畑2036-23
- E-mail: higashi0049@gmail.com ●ホームページ: <https://www.facebook.com/susonohigashioyaji>
- 代表者: 小田 圭介(会長)

優秀賞

今帰仁子供太鼓いまじん【沖縄県】

創作エイサーを通じ広がる、子ども達の世界

選考理由

地元の伝統文化を身につける過程で、子どもたちが自信を深め、自己の確立、地域愛を醸成しています。また、子ども同士で教え合い、支え合うことを通して、次世代育成が自然と循環している点も高く評価されました。

活動の概要と目的

**魂を揺さぶる太鼓の音、躍動感ある踊り。
ソウルフルな演舞の体得によって自信と郷土愛が育まれます。**

沖縄の伝統芸能エイサーは、旧盆の最終日に先祖の霊を送り出すため、各地域の青年会によって踊り伝えられてきました。そのエイサーを子どもたちの自信につなげたいとの意図から、1994年青年エイサー団体で活動していた玉城みちよ（現顧問）が、県内初の子どもエイサー団体として発足させたのが「今帰仁子供太鼓いまじん」です。

毎週土曜日の夕方2時間、公民館で練習。高齢者施設の慰問演舞や震災関連イベントでの自主演舞を通じ、当事者についての学びを深めています。また、数年に1回は海外遠征を企画し、子どもたちが異国の文化や多様な価値観に触れ、視野を広げることを目指しています。2025年1月には7年ぶりにアメリカ遠征も復活させました。

「イーヤーサーー！」という大きなかけ声、魂を揺さぶるような太鼓の音とともに、躍動感ある踊りで練り歩くエイサー。ソウルフルな演舞体験は、自信を持って生きていくための武器となって子どもたちを支えます。

子どもたちの変化・成長

エイサーを体得する中で自信と郷土愛を育み、自律的な行動を見せるようになるほか、子ども同士で互いに協力し合い、他者を思いやる気持ちを持つようになります。海外遠征をきっかけに英語を学び、留学する生徒も。学校を休みがちだった村内児童が「特別枠」で海外遠征に参加し、自信を取り戻した例もあります。



ご縁を大切に活動するメンバー達。世界遺産今帰仁城跡から米国の故人へ想いを届けようと、OB・OG団員を含む約40人が集結し感謝を込めて踊りました。



今帰仁村中央公民館と埼玉県宮代町立コミュニティセンター進修館との設計者が同じであることから企画された初の文化交流事業で宮代町を訪問し、演舞を披露しました。

参加者の声

埼玉県宮代町のイベントで町長さんを舞台に連れ出して一緒に踊りました。「楽しかった」と言われ、うれしかったです。

(小学1年生)

慰問演舞で「小さいのにエイサーが踊れて、すごいね。また踊りに来てね」と言われたことがうれしかったです。

(小学2年生)

いまじんに入って、年下の子が困っているとき助けてあげたり、悪いことをしていたら注意したりできるようになりました。

(小学5年生)

県外・海外でエイサーを披露して、たくさんの人にエイサーを知ってもらいたい、沖縄の文化を広げていきたいです。

(小学5年生)

エイサーは大きな武器。海外に出たとき自分を表現できるものだし、ものおじせず発表する力が身についたことも財産です。

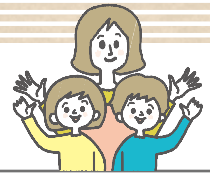
(22歳OG)

友だちのために何かしよう、お客さんに楽しんでもらおうなど、他者を思う行動ができるようになっていきます。

(小学生保護者)

今後の課題と未来の方向性

近年は子どもたちの関心がヒップホップダンスやスポーツなどに移り、エイサーは「古臭いもの」と思われがちです。そのため一生懸命頑張っている団員には「もっとエイサーが認めらたら」との葛藤があり、今回表彰を受けたことは誇りにつながりました。30年の節目を迎え、卒業生も含む大人と子どもで作る創作エイサーの記念行事を計画中です。2025年1月には、7年ぶりに渡米交流も再開。海外遠征のある活動として再認知され、エイサーに興味を持つ子どもたちが増えることを期待しています。



活動の特長

エイサーで培った自信は一生の武器となり、子どもたちを支える

太鼓をたたきながら大きく足を上げる、「イーヤーサーサー」という大きなかけ声を発するパフォーマンスを、最初は恥ずかしがる子どもが大半です。しかし、練習を重ねる中で小さかった動きや声が大きくなっていきます。低学年生の前に高学年生が立って手本を見せながら踊ったり、ペアを組んでお互いの改善したほうがいい点を伝え合ったり、共に成長することを大事にしています。

沖縄の小さな村の子どもたちを大きく成長させる海外遠征

今帰仁村の外には大きな世界が広がることを知ってほしいとの思いから、これまでにアメリカ16回、韓国2回、中国1回、台湾1回の海外遠征を実施。村内の子どもなら団員以外でも参加できる「特別枠」も設けています。アメリカを訪問した高校生はウイスコンシン州のマディソン高校でエイサーを教え、ワシントン桜祭りで共演するなど、現地で多様な人々と交流し、大きく成長します。

他者に伝える力、他者を思いやる心を養う

毎回の練習後、一人ずつスピーチをする時間を作っており、発表が苦手な子ども、回を重ねるごとに「自分のことを他者に伝える」ことができるようになります。また、舞台上自分だけが目立つのではなく、年少の子の帯を年長の子が直すなど、他者を思いやれる指導をしています。発達障害等を持つ団員も在籍していますが、お互いの個性を尊重しながら切磋琢磨しています。



エイサー演舞や異年齢での活動の中で向上心に火がついた子どもたちは、自然と互いに高め合うようになり良い循環が生まれます。



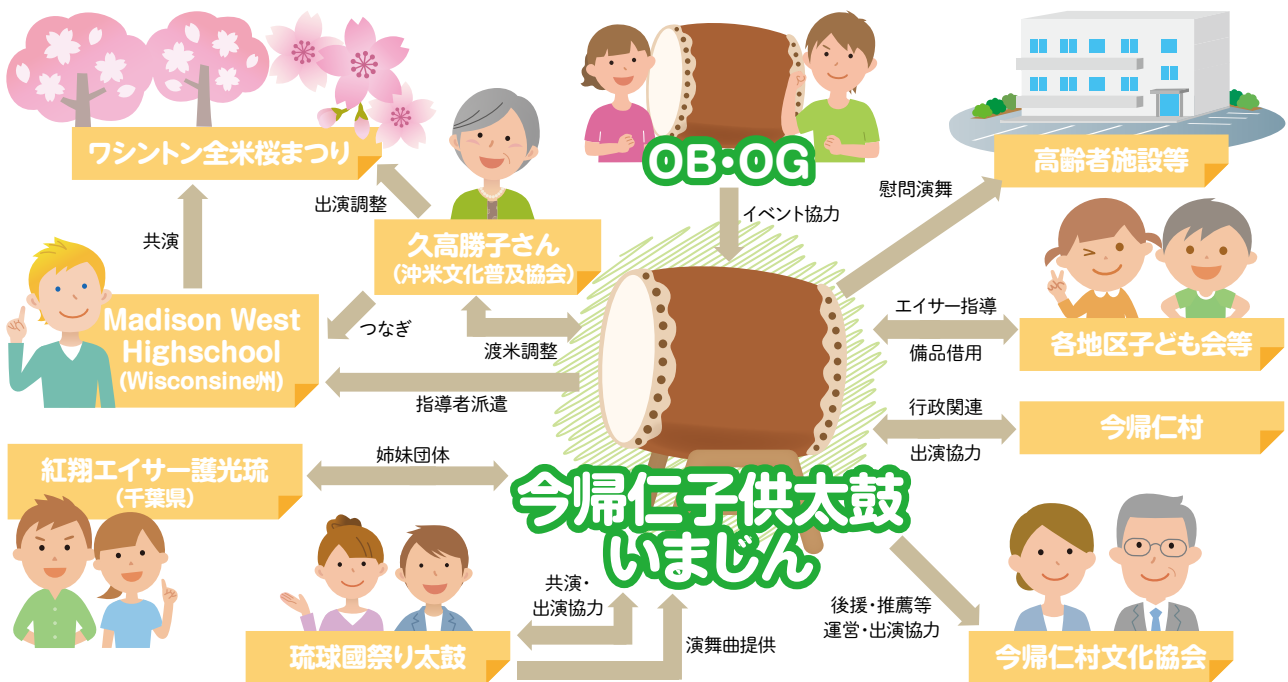
2025年1月29日～2月10日、7年ぶりの渡米交流を実施。高校でのエイサー指導のほか、幼稚園でのワークショップも。



毎回の練習後、輪になっての1分間スピーチ。自分の思いや出来事を人に伝えるとともに、人の話を聞く姿勢も養います。

活動の広がり

現在の子ども団員は11名と少ないですが、代表や副代表、指導員など運営メンバーはすべて卒業生であるため、体験に基づいた指導ができることが強み。また、県内外にいる約50名のOB・OGがイベントごとに集結するスタイルで活動しています。地域で高齢者施設の慰問演舞、各地区子ども会へのエイサー指導、琉球国祭り太鼓との共演などを行っているほか、1997年に始まった渡米交流は16回を数え、支援者は海外にも広がっています。



連絡先

- 所在地：〒905-0401 沖縄県国頭郡今帰仁村字仲宗根302
- お問い合わせ：https://forms.gle/G9zB8ahnGkXWET136
- ホームページ：https://www.instagram.com/imajintaiko
- 代表者：山川 源太 (団長)
- 担当者：高良 琴美 (副団長)

特別賞

NPO法人 CoCoTELI【大阪府】

精神疾患の親をもつ子どもへの伴走支援

選考理由

表面化されにくい社会課題に対し、公的な支援を受けにくいソーシャルメディアを活用して正面から取り組んでいる点が高く評価されました。このようなオンラインの活動が社会的にも支持されていくことが期待されます。

活動の概要と目的

子どもたちの心の負担を少しでも軽減し、より良い未来に向かって歩んでいけるよう支援します

精神疾患のある親を持つ子どもは、周囲には話を打ち明けにくく、悩みを抱え込みがちです。そのような子どもたちが安心して相談できる居場所や、同じような経験を持つ仲間との出会いの場を、オンライン上に提供しています。

「唐揚げとハンバーグどっち食べたい?」と聞かれたときに、唐揚げって答えたほうが家庭は円満に行くなと思うと、ハンバーグが食べたくても「唐揚げ」と答えてしまったり。そういった経験の積み重ねから、自分の気持ちがわからなくなったり、人を頼ることができなくなったりします。自分を主語に話したり、考えたりする経験が希薄な傾向にあります。

精神疾患は外からは見えにくい。見えにくいから子どもは支援が受けられない。その子どもが成長して親になり子どもをもったとき、もしかしたら同じように連鎖してしまうかもしれない。その連鎖を止めるために、活動が始まりました。

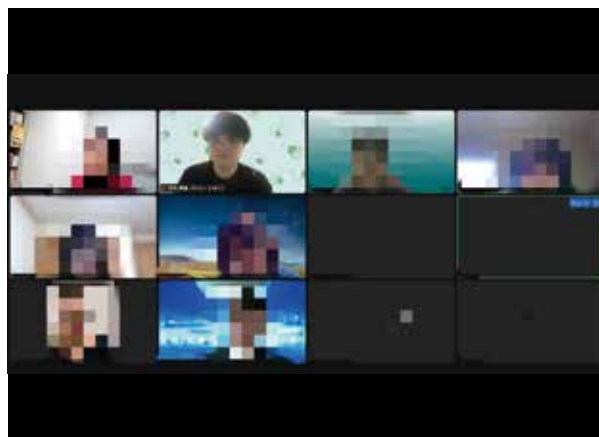
子どもたちの変化・成長



「家を出たかった」など自分の気持ちに気づいたり、考えを客観的に見ることができるようになったり。実際に家を探しに行き、家族と別居することができたケースもあります。実家を出た後もオンライン上に悩みを打ち明けられる環境があることで、安心感を得ることができます。



イベントでは、アクセスするのが難しい情報や、どんな情報が必要なのかわからなかった場合にも情報を提供しています。ゲストを招くことも。



Zoomによる交流会。雑談できる気軽な会が月4回、悩みを話せる集いのようなものが月2回。家族のことから趣味の話まで幅広く話しています。

参加者の声

家庭内のつらさをつぶやく時、頭が整理されたり、気持ちが少し楽になる感じがします。昔と比べて悩みの質が変わりました。

(16歳学生)

CoCoTELIに入って自分の気持ちを吐き出せるようになったこと、相談できて、共感してくれる人ができたことが良かったです。

(17歳学生)

親のことでつらいことがあったとき、ため込まないでいられたのは、CoCoTELIのおかげ。精神的なダメージは軽減されたと思います。

(17歳学生)

悩みをお互い共有し理解し合える人たちと出会って、自分だけじゃないんだという安心材料のひとつになりました!

(21歳学生)

困っていた時に相談を聞いてくれて、どうするか一緒に考えてもらえたりとかして、すごく助かることができました。

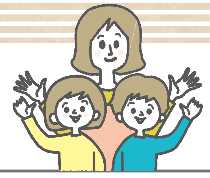
(21歳学生)

本格的に実家を出ることを考え始めたころ、相談をしたり、弱音を吐ける人に恵まれました。心理的に大きな安心材料になっています。

(25歳学生)

今後の課題と未来の方向性

「オンラインのよくわからない活動」と思われることが多く、賛同を得にくいのが現状です。大都市圏で活動すれば、広めていくのは簡単ですが、過疎化していく地方の子どもたちを置き去りにしてしまうのは、CoCoTELIの在り方としては違うのではないかと、今後もオンラインであり続けていきたい。2023年度実施したクラウドファンディングでは、562人から寄付がありましたが、今後は支援計画、経営計画を立てやすくするため、安定的な収入源として継続型寄付の形を増やしていきたいです。



活動の特長

全国の子ども、若者と出会う オンライン上の居場所

チャットツール「Slack」を使ったオンライン上の掲示板。家族の悩みはもちろん、今日のハッピーや好きな音楽、映画、返信不要の独り言などが、北海道から沖縄まで、全国から書き込まれています。なにかあった場合、現地に行くことが難しいオンラインという状況の中で、心配になったものについてはCoCoTELI側からダイレクトメールをして、チャットでの相談を促します。



ウェブでは今、直面していたり、今後直面するかもしれない出来事が少しでも楽になるよう、様々な分野の専門家の記事を掲載。

ピアサポーター養成講座を実施。 支え合いの連鎖を作ります

同じような経験や悩みを抱えている（抱えていた）子どもが受講しました。支え合いの連鎖を作ることが目的。自分も相手も守る方法や、自分と他人との境界線についてなど学びます。

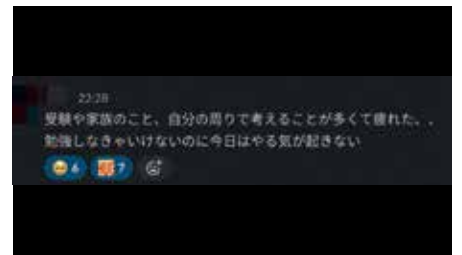
0期生8人が修了し、そのうち5人がピアサポーターとして活動しています。養成して終わり、ではなく「やりたい」を一緒に形にしたり、共に悩んだりします。



精神疾患の親をもつ子ども・若者の経験や想いを掲載。記事の中から似たような経験やロールモデルを探ることができます。

家を出る相談を受け、 家探しをすることも

基本的な相談は1時間程度。ピアスタッフと専門職（ソーシャルワーカー）の、できる限り3人で（1対1だと緊張してしまうので）。「安全・安心に、自分を主語に話せる場」を目指します。大人に対する信頼感を獲得できていない子どももいるので、歳の近いピアスタッフも対応するのが良いのではないかと考えています。必要がある場合は地域機関や他団体との連携を模索していきます。



チャットツール「Slack」を使ったオンライン上の掲示板。公式LINEや相談支援も含め、200人前後の子どもがつながっています。

活動の 広がり

2020年に学生団体として活動が始まりました。子どもたちと出会う中で、もっと大きな動きをしていく必要性を感じ、2023年にNPO法人化。当面は、オンライン上の支援構築と組織基盤強化、寄付型NPOとして民間助成金やサポーターを募り活動を進めています。将来的には、予防的に救える子どもを増やすためにも、親が精神科病院を受診したり休職したタイミングで、その子どもにも必要があれば支援提供できるような仕組みづくりを目指しています。



個別相談
(精神保健福祉士なども対応)
相談回数219回



データは2024年3月末時点

連絡先

- 所在地: 〒541-0046 大阪府大阪市中央区平野町1-7-1 堺筋高橋ビル5階B-506
- E-mail: toi.hirai@cocoteli.com ●ホームページ: <https://cocoteli.com/inquiry>
- 代表者: 平井 登威 (理事長)

歴代全国大賞受賞団体

2008～2023年度 ※詳しい活動内容はホームページで紹介しています。

2023
年度

横浜市立南吉田小学校（神奈川県）

テーマ **国籍を超えて
笑顔で結びつなげよう南吉田**

活動
概要

外国籍とつながりがある子どもが全校の54%を占めている同校で、中心的役割を担う児童会が「笑顔で結びつなげよう南吉田」を合言葉に、多言語あいさつ運動や国際読書会など多様性を尊重する様々な活動を行い、思いやりの心を育てています。



2022
年度

島根県奥出雲町立高尾小学校（島根県）

テーマ **愛されて十年
ちっちゃな小学校の全校落語**

活動
概要

全校生徒5名の極小規模校での「こども寄席」の活動。学校の定期発表会の他、高齢者サロンなどの福祉施設で防災、交通安全、小児がん対策などの募金イベントに協力。子ども同士が支え合いながら、地域の交流を生み出し、元気づけています。



2021
年度

一般社団法人 ^{ポ ン テ} Ponte とやま（富山県）

テーマ **ごちゃまぜの中で育つ
～つながる・まなぶ**

活動
概要

個人宅のカフェで、不登校、発達障害、健常問わずあらゆる子どもたちが「ごちゃまぜ」で交流する居場所活動。フリースクール、アート体験、屋外活動など様々な活動を通して、子どもたちの社会性や自己有用感を育てています。



2020
年度

特定非営利活動法人 おやこ劇場松江センター（島根県）

テーマ **げきじょっこまつり
初めての買いもの**

活動
概要

37年間続く「げきじょっこまつり」のメイン企画「ドン券バザー」は、おもちゃのリサイクルフリーマーケット。買いもの時、大人は手出し口出し禁止。「初めての買いもの」を通して、自立心やコミュニケーション力を育てています。



2019
年度

社会福祉法人 阪南市社会福祉協議会（大阪府）

テーマ **あなたも私も笑顔になる
～子ども福祉委員～**

活動
概要

阪南市内の小中学生によるボランティア組織「子ども福祉委員」。自分たちで必要な活動と話しあい、月に1～2回活動。支えが必要な高齢者宅を訪問して庭の手入れや掃除のお手伝いや福祉施設のお手伝いを通して地域に根付いた活動を展開しています。



2018
年度

特定非営利活動法人 パノラマ (神奈川県)

テーマ

高校内居場所カフェ

～先生でも親でもない大人がいる、文化的シャワー提供の場～

2017
年度

長野市立城東小学校 (長野県)

テーマ

共に学ぶ長野ろう学校との41年目の交流活動

～共生社会の形成に向けて6年間の継続交流～

2016
年度

和歌山県立熊野高等学校 Kumanoサポーターズリーダー部 (和歌山県)

テーマ

地域に根ざし、地域に貢献する高校生リーダーを目指して

2015
年度

かづの はちまんたい
鹿角市立八幡平中学校 (秋田県)

テーマ

郷土愛を育み、人間関係力を培う八幡平ボランティアガイド

2014
年度

みなみよしなり
仙台市立南吉成中学校 (宮城県)

テーマ

大震災から学び、前に進む力を培う、復興支援活動と防災教育

2013
年度

いずみみなみ
熊本市立出水南小学校 (熊本県)

テーマ

小学校と支援学校の子どもたちが学び合い、成長し合う交流活動

2012
年度

東中ファミリーサポーターズ・東中地域活性隊 (兵庫県)

テーマ

地域・学校・家庭と生徒たちによる循環型の地域活性活動

2011
年度

いしぐれ
石榑の里コミュニティ (三重県)

テーマ

地域全体で子どもを守り育てるための学校と地域による
組織づくりと協働活動

2010
年度

特定非営利活動法人 オバパト隊 (熊本県)

テーマ

高齢女性パトロール隊による、安心安全な子育て環境づくり

2009
年度

おきたま
山形県立置賜農業高等学校演劇部 (山形県)

テーマ

農業高校の視点から、食を伝える食育ミュージカル

2008
年度

公益社団法人 群馬県助産師会 (群馬県)

テーマ

子どもの自己肯定感を育む「いのちの講座」



公益財団法人 パナソニック教育財団

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-10 第2ローレルビル6階
TEL.03-5521-6100 FAX.03-5521-6200

こころを育む総合フォーラムのホームページでは
過去の受賞活動も紹介しています。

<https://www.pef.or.jp/kokoro-forum/>



こころを育む 🔍